

# 『風』（芥川龍之介）考覚え書き

——『手巾』の批評精神との関連——

吉 田 俊 彦

## はじめに

『風』は大正五年五月発行の雑誌「希望」に発表された小さな作品である。批評の対象になることもなく埋れた作品となっているが、この作品を支える批評精神に着目してみると、五箇月後の十月に発表された『手巾』の重要な形象素地をなしていると考えられる。三好行雄氏は、『手巾』について、「小説の表だった主題は、型と化した人生態度の拒絶にあるのだろう。近代の醒めた眼による武士道の批判というテーマは明確である」と論じておられるが、この批評観点は、そのまま、『風』に適用し得るものである。

近代の醒めた批評眼が、「加州藩の古老に聞いた話」（「新思潮」第九号、後記）を裁断していくその形象過程において、どういう個性を結実させているか、勿論速断はしがたいが、今昔物語を素材とした歴史小説の特性から推して、先人の多くの影響のもとに巧緻な工夫を凝らしたものと思われる。そして、強い影響を受けた先人の作品としては、夏目漱石の「吾輩は猫である」（以

下「猫」と略記）と「夢十夜」（第七夜、以下「第七夜」と略記）を挙げる事ができよう。

この小説では、まず、漱石の「猫」に共通する「風」の批評精神を抑え、ついで、「風」のイメージ形象の支えとなっている「第七夜」の影響に注目し、最後に、『手巾』の主人公・長谷川龍造先生の形象素地をなす「風」の作品史的位置を尋ねてみたい。

## 一 『風』の批評精神と『猫』

元治元年の長州征伐は、蛤御門の変の処罰として幕府が軍を派遣したものであるが、武力を誇示しながら開国を要求してきたアメリカに屈服し締結した不平等な日米和親条約、重要輸出品の高騰が一般物価にも波及し生じた国内経済の混乱、これらに伴う国内政治の混乱、そして、幕府と朝廷との間に立って、新たな国政を目指す政治運動、こうした激動期に起る、八月十八日の政変と蛤御門の変と長州征伐という一連の事件は、国運にも関る緊迫し

た歴史事件であったと見なければならぬ。

《元治元年十一月二十六日、京都守護の任に當つてゐた、加州家の同勢は、折からの長州征伐に加はる為、国家老の長大隅守を大将にして、大阪の安治川口から、船を出した。／（略）紅白の幟を風にひるがへして、川口を海へのり出した時の景色は、如何にも勇ましいものだつたさうである。》（『風』一）

幕府に深く関りを持つ加州家にとって、長州征伐は家運と国運のかかる聖戦と言えるものであり、「長州征伐に加はる為」に船出する「如何にも勇ましい」様子の説明からは、簡潔ながら、激動期の緊迫した歴史の相貌を感じることができよう。ところが、この船出の説明につづく船内の状況描写には、嚴肅な歴史的使命を担った加州家の人々の勇壮な志気を見出すことはできない。このように、船出する勇壮な船の外貌と風騒動に腐心する船内の様子との対照を描く芥川には、漱石の「猫」と同質の笑いの批評精神が鋭利に働いていたものと考えられる。

《吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師ださうだ。学校から帰ると終日書齋に這入つたがり殆んど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つて居る。当人も勉強家であるかの如く見せて居る。》（『猫』一）

「猫」のこの一節は、「風」の船出の説明部に当る部分である。「職業は教師」「学校から帰ると終日書齋に這入つたがり殆んど出て来る事がない」という説明によって読者に喚び起こす主人公

・苦沙弥先生のイメージは、研究に精励する実直な教育者の姿である。ところが、この外面的な人物描写につづく生活実態の説明部からは、精神の弛緩した怠惰な生活者の姿しか浮び出てこない。このような苦沙弥先生の生活実態の暴露は、猫の視点をを用いてなされているが、このことによって、苦沙弥先生の人間的価値は、一層大きな低落振りを見せるのである。「風」には、このような動物視点の導入はなされていないが、「身動きも碌に出来ない程狭い」（一）船中に「沢庵漬」（同）の「臭気」（同）を充満させ、そこに大量の虱を発生させ、そして、その虱によって加州家の侍全員を悩ませる状況設定は、猫の視点と同様に、人間の価値の低落化を招く重要な力になっている。

梅原猛氏は、「ベルグソンの笑いの理論批判」の中で、ベルグソンの「機械的なこわばり」理論を排し、「価値低下のトリック」に着目されながら、滑稽は「人が一人の人間の注意深いしなやかさと、生き生きとした屈伸性を見出そうとするところに機械的なこわばりがある」からではなく、「価値あるものが、突然に価値のない姿をさらし、価値あるものと価値のないもののコントラストが生じ、その結果価値低下が生じるから」生れるとされているが、「風」と「猫」の両作に認められる笑いの批評精神は、このコントラストと価値低下による滑稽化に支えられたものである。

ところで、研究に精励する実直な教育者の外見とは対照的な、惰眠を貪る苦沙弥先生の生活実態の暴露部分に当る「風」の描出

部は、「しかし、その船へ乗組んでゐる連中は、中中勇ましがつてゐる所の騒ぎではない」という言葉によつて始められる虱騒動の場面であるが、ここには、滑稽化の二重構造によつて支えられた鋭利な批評精神の働きを捉えることができる。

まず第一は、観念的合理性を機軸とした森樞之進の功利的な生活論理である。彼だけは「不思議に、虱をとらない」「(二)のであるが、これは彼だけが虱に食われないためではない。「体に虱があると、必ちくちく刺す」(同)ので、「どうしても掻きたくな」(同)り、やがて、「痒いと思つて掻いてゐる中に、自然と掻いた所が、熱を持つたやうに温くな」(同)り、そして、「睡つきもいし、風もひかない」(同)からである。つまり、彼自身の論理によつて証された功利性を確信しているからに外ならない。この観念的合理性を機軸とした功利的な論理が鹿爪らしく展開されればされるほど、彼の主張の論理展開に漲る高尚な文化性とその主張のモチーフとなる虱という低俗な非文化性とのコントラストが鮮明になっていくとともに、その主張の価値低落が起り、不毛な尊大さのみを露呈するのである。しかも、この不毛な尊大さを振りかざし、虱論議に耽る意識の低俗性は、長州征伐という峻厳な歴史的使命の高尚性とのコントラストを鮮明にしながら、その峻厳な歴史的使命の価値低落をも惹き起こすのである。

第二は、伝統的な道徳観念を支えた井上典蔵の批判的論理である。彼は「森の虱論に反対する pharisien」(三)の「筆

頭」(同)であるが、「虱がゐたからと云つて、人間の体は決して温まるものではない」(同)という主張に加え、「身体皮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり」(同)とする「孝経」の精神を支えに、「身体を、虱如きに食はせる」(同)非を容めるものである。この高邁な道徳精神が鹿爪らしく主張されればされるほど、その精神に漲る高尚な文化性とその主張のモチーフとなる虱という低俗な非文化性とのコントラストが鮮明になっていくとともに、その主張の価値低落が起り、不毛な尊大さのみを露呈するのである。その結果、長州征伐という峻厳な歴史的使命の価値低落までも招くことは、森樞之進の場合と同様である。

第三は、刃傷沙汰まで惹き起こしながら、「虱。虱」と叫びつづける森、井上両侍の争いであるが、この二人の争いにも、滑稽化の二重構造によつて生じる諷刺的な批評精神が有効に機能していることは言うまでもない。

## 二 『虱』の批評精神と『第七夜』

《かう云う具合に、船中の侍たちが、虱の為に刃傷沙汰を引起してゐる間でも、五百石額のお金毘羅船だけは、まるでそんな事には頓着しないやうに、紅白の幟を寒風にひるがへしながら、遙々として長州征伐の途に上るべく、雪もよひの空の下を、西へ西へと走つて行つた。》(四)

これは「風」の末尾の一節であるが、この一節に仕掛けられた形象的機能は、これまで見てきたような価値低落を誘うものと言うことはできない。ここには、卑俗な日常次元に下りきって生活する人々の個人的運命を冷厳に支配する歴史的運命が、象徴的にイメージ化されていると言えるのである。この唐突なイメージ形象には、漱石の『第七夜』の強い影響があるものと考えられる。

《「此の船は西へ行くんですか」／船の男は怪訝な顔をして、しばらく自分を見て居たが、やがて、／「何故」と問ひ返した。／「落ちて行く日を追懸ける様だから」／船の男は阿々と笑った。さうして向ふの方へ行つて仕舞つた。／「西へ行く日の、果は東か。それは本真か。東出る日の、御里は西か。それも本真か。身は波の上。檣枕。流せ流せ」と囁してゐる。(略)／自分は大愛心細くなつた。何時陸へ上がれる事か分らない。さうして何処へ行くのだから知れない。只黒い煙を吐いて波を切つて行く事文は儘かである。》(『第七夜』)

「落ちて行く日を追懸ける様」に進む船は、当然、西に向つていとと解することができる。が、それだけに、そのような認識を「阿々と」笑い、そして囁きたてる水夫達の歌声には、重い意味が込められていると見なければならぬ。坂本浩氏は、この水夫達の歌声について、「もちろん讚美歌ではない。東洋と西洋との両方の波をかぶって、当てもなく流される近代日本の姿であり、漱石自身の文明観でもある。永遠への信仰を頭では知りながら、

心には信じえない自己への懷疑である。また、東洋の血脈を体感しながら、その具体化へも随順しえない自己への反省でもある」と論じておられるが、確かに、水夫の歌声は漱石自身の存在不安と密接な関りを持つものとして見ても可い。

「それから」において、「西洋の圧迫を受け」(二〇)ながら「牛と競争する蛙」(同)の愚を重ね、そして、「無理にも一等国の仲間入をしやう」(同)とする日本の「精神の困憊」(同)と「身体の衰弱」(同)と「道徳の敗退」(同)を捉えた漱石は、「行人」においては、「美的にも倫理的にも、知的にも鋭敏過ぎ」(三十八)る内省的知識人・一郎の存在不安と向かい合っているが、こうした文明論的不安と存在論的不安との融合した底知れない不安を夙に感知し、象徴的に形象化したのが「第七夜」であると言えよう。「船」は、西洋の圧迫下で背伸びしながら近代化を急ぐ日本の歴史的運命を象徴するものであり、「自分」の不安は、そうした歴史的運命のもとで、自己の存在の意味を問いつづけなければならないかつた内省的知識人の苦悩と不安を象徴するものと見ることが出来る。

「西へ西へと走つて行」(四)くという方向性によって印象的イメージを定着させ、そして、「船」に日本の歴史的動向を象徴化する「風」末尾の形象的工夫は、この「第七夜」(註三)と全く同工のものである。問題は、船のイメージに象徴化した歴史的動向と対峙する作者の批評精神の質的違いである。「第七夜」の漱石が、

「船」に象徴化した歴史の動向を不可避な歴史的運命として厳然に受けとめながら、その支配のもとで解体していきそうな己の存在危機と正面から取り組んでいるのに対し、「虱」の芥川は、「船」に象徴化した歴史の動向を不可避な歴史的運命として受けとめているとは言えない。

加州家の侍達に、高邁な武士の精神性を鹿爪らしく発揮させながら、その精神に漲る高尚な文化性とその主張のモチーフとなる虱という低俗な非文化性とのコントラストに合わせ、その精神性の価値低落を誘い、そして、そこに生じる滑稽さによって武士的存在性を相対化した「虱」の芥川は、歴史的動向を示す重大な國事をも相対化しているのである。つまり、「虱」の文脈には、武士的存在性とともに歴史的動向をも相対化する視点が確立していたと言えるのである。ところが、「船中の侍たちが、虱の為に刃傷沙汰を引起してゐる間でも」「まるでそんな事には頓着しないやうに」（四、傍点引用者）と侍達の生活とは無関係な船の進行状態を強調的に描き出しながら、「西へ西へと走つて行」（同）く船のイメージを印象的に定着させた「虱」末尾の形象性は、卑俗な日常次元に下りきって、樂觀的に生活する民衆の人間の生を冷徹に支配する歴史的運命の象徴として機能しはじめているのである。芥川は、すでに相対化したはずの歴史的動向に、何故唐突に、高次の絶対的な力を与えなおし、そして、侍達の生を相対化しなければならなかったのか。ここで、芥川の文明論に注目して

みたい。

《吾人は到底、維新前後の攘夷家の如く、日本の神國たる所以を以て、世界の列國は当然我に劣る、霄壤の差あるものと盲信する能はず。又、無邪氣なる帝國主義者の如く、我國に不利なるものは悉く人道に違反するものにして、我國に有利なるものは悉く天下の公道に一致するものなりとの盲斷を下す事を得ず。従つて対米問題に於ても亦、加州人士の運動が一面に於て甚無理なきを感じざる能はざる也。吾人は常に現代の日本を憐まざるを得ず。これは如何なる愛國的热情を以てするも、到底認めざるを得ざる事實なり。經濟情態に於ても文化の程度に於ても日本、本、の如く窮乏せられ、日本の如く貧弱なる國家は、恐らく他に類を見ざる所なる可し。》（傍点引用者）

これは、高等學校時代（明治四三、九、大正二、七）のものと推定される論説文「対米問題」の中の一節である。明治三十九年の満州市場の門戸開放に絡む險惡な日米關係のもとで顕現する「白人の偏見」と「黄人の國家的品位」の問題について触れたものであるが、芥川の問題把握の特徴は、対米問題を大きく対白人問題として捉えなおし、そして、その対白人問題の根底に、白人の偏見もさることながら、日本の貧弱な經濟状況とか文化状況の問題が大きな比重をもって占めているとする点にある。このような認識を持つ芥川には、漱石のように、西洋的近代化への急傾斜によって賣される自己存在の危機感を持つことはできない。それより

も、低迷している貧弱な日本の文化状況に対する危機感が、より切実な関心事であり、それが「風」の主要な形象モチーフにも影響したものと考えられる。

ところで、第一次長州征伐の参謀を務めた西郷隆盛が、「正々堂々の兵をもつて長賊を驅りつくし申すべく」と言つた禁門の変の際とは異なり、実力行使を避けるために長州藩の内輪もめを利用しようとしたその苦心の背後には、出兵する費用の負担に苦しんでいた諸藩の事情とか、いざ出陣となれば、武器類も古くて用を足さず、修繕のために多くの日時を要する幕府自身の事情があったと言われている。維新前後の攘夷家の盲信を相対化し、日本の国情を冷静に見究め、そして、「経済情態に於ても、文化の程度に於ても日本の如く窮迫せられ、日本の如く貧弱なる国家は恐らく他に類を見ざる所なる可し」という認識を持たざるを得なかった芥川にとって、こうした長州征伐における幕府および諸藩の困窮状態とか権威主義の策略は、恰好の題材であつたと言えるのであり、これを作品化しようとするとき、「対米問題」の中ですでに整理しておえていた日本の文明状況についての認識は、自ずと作品形象に投影したと言えよう。「身動きも碌に出来ない程狭い」(一)「船中に「沢庵漬」(同)の「臭気」(同)を充満させ、そこに大量の虱を発生させる状況設定とか、また、さまざまなもの価値低落を惹き起す武士的存在性の滑稽化は、必然の結果であつたと言わなければならない。

貧弱な生活水準を設定し、非文化的な次元の風騒動に加州家の侍達を没入させ、そして、武士の高邁な精神性と長州征伐という国事の尊厳性と時流の方向を示す為政者の権勢を笑殺し去つた芥川には、その文脈上、「第七夜」の漱石のように、「船」の象徴的イメージを、絶対的な支配力を持った歴史的運命の象徴として機能させる余地は残されていなかったと言えるのであり、作品末尾における「船」のイメージ形象は、「第七夜」の未消化な導入と考えざるを得ない。この未消化な導入は、形象上の敷衍を招いただけではなく、武士の尊大振つた形式主義の欺瞞性を露呈しながら卑俗な日常の必要性に固執しつづける加州家の侍達に、したたかな民衆的エネルギーを探り当てていく新たな認識視角を明くことも不可能になつたと言えるのではなからうか。

### 三 『風』の批評精神と『手巾』

福沢諭吉は、幕府への建白書の中で、「朝敵だ勤王だといつても、つまりは兵力の強弱でどうにでもなり、勅命などというのは、ローマ法皇の命令と同様で、ただ兵力に名義をつけたようなものだ」と断じたと言われているが、芥川の「雑筆」の中には、この諭吉と同質の政治力学に対する認識を見出すことができる。

《流俗とは、何時も前代に有用だつた真理を固有してある人間である。尤も一時代の長さは何年と、精密にきまつてゐる訳ではない。(略)一時代前に有用だつた真理、二時代前に有用だ

つた真理、三時代前に有用だった真理、——流俗もその真理の時代なみに、何種類もあることを忘れてはならぬ。しかし流俗の有害な程度は、その固守してゐる真理の時代の新しさに丁度正比例する。嘘だと思つたら、尊王攘夷の精神などが如何に今は無害になつたかを見るが好い。》（『雜筆』へ流俗へ 傍点引用者）

尊王攘夷の精神が新たな政治秩序を目指して幕政と対立するとき、その精神は幕府にとって脅威であり、その精神の信奉者は秩序破壊を狙う奸賊に外ならない。しかし、『何種類もある』真理を時流の中で相対化して考える芥川にとっては、永久不変の絶対的奸賊などあり得るはずもないのである。大正九年七月に発表された『雜筆』は『風』の発表時期より四年下るものであるが、『流俗』の相対性を「真理」の相対性との関連のもとに捉える『雜筆』の認識的特徴は、武士的存在性を滑稽化することによって、武士の高邁な精神性と國事の尊厳性と、そして、為政者の権勢を笑殺した『風』の相対化の姿勢にそのまま直結するものである。この姿勢は、さらにまた、『手巾』の主要人物、長谷川先生のモデルとなつた新渡戸稲造に対する批判の中にも見出すことができるものである。

《人間は色々汚いものを有つてゐるから、友達同志でも醜いものを遠慮なくさらけ出し合ふと、互に愛想が尽きて世は成立ない。》（略）滔々として墮落すると言はれた事があります。私は

之を聴いて非常に憤慨しました。（略）事実を糊塗するのは怪しからんと思ひましたから、それ以来倫理の講義を休むことにしました。》（『明日の道德』大正一三、六 傍点引用者）

これは、古い時代の倫理観を固守し、人間の真情を糊塗する偽善性、つまり、生の実体を伴わない空虚な形式主義への反撲から発した批判と解してよからう。この批判を支える批評精神は、

「風」と「手巾」の両作に共通して働くものと言へるが、ここで「風」と「手巾」両作の対応関係に注目してみたい。

第一は、長州征伐に出航する加州家の船の雄姿と長谷川先生の文明論との対応である。

《先生の信する所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆ど、これと云ふ程の進歩も認める事が出来ない。否、寧ろ、或意味では、墮落してゐる。では、現代における思想家の急務として、この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論断した。》（『手巾』）

「物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる」が、「精神的には」「寧ろ、或意味では、墮落してゐる」と考える長谷川先生の時代認識は、「奥行を削つて、一等国だけの間口を張つ」（『それから』六）た日露戦争後の日本の暗黒状況を裁く漱石の文明批評とも照応するものであり、また、歴史書時代の説明から見ても、

至当な状況認識と言わなければならない。

《日露戦争後、日本はばく大な外資を輸入しながら、工業生産は相変らず急速に発展させたものの、一九〇七年の恐慌以来、本格的な好景気にもどることはなかった。(略) 国民の大多数をしめる農民と労働者はきわめて貧しく、国内市場は余りにもせまかった。そして過大な軍事費と植民地支配費のために、国家財政はほとんど破産しそうであった。一九一四年の外債の残高は一九億八千万円、同年の租税収入の六倍をこえ、その利払にもこまった。貿易は入超つづきで、正貨の現在高は連年減少し、兌換制度維持にも苦しんでいた。この経済状況を背景にして、民衆は閥族打倒、軍備拡張反対、廃税、減税の要求をもって、官僚・軍閥政府を攻撃してやまず、民衆運動がつづげざまに二代の内閣を倒した。》

ところで、問題は、精神的に堕落した時代状況に対する長谷川先生の救済策である。莫大な外債、貿易入超を余儀なくしている日本の国際競争力、植民地の拡大を狙う対外政策、農民、労働者の貧困、あるいは、近代的自我の未成熟、これら種々の混乱が転換する外発的近代化の歪みを、日本固有の武士道精神によって一元的に解決していくことは至難のわざである。武士道精神とキリスト教精神の一致点を見出し、武士道精神を、堕落した「日本の精神的文明」の「救済」のためのみならず、「欧米各国民と日本国民」との「相互の理解」や「国際間の平和」「促進」のための

力にしようとする長谷川先生の考えは、現実の複雑怪奇な具体的問題から遊離した観念的理想論と言わざるを得ない。これは、「風」において、長州征伐に向って出航する加州家の船が、出兵する費用の負担に苦しんでいる諸藩の逼迫した経済事情とか武器類の多くが破損して使用不能になっている幕府の困窮状態など、弱体的な戦力基盤の問題を隠蔽し、しかも、戦闘を回避する戦略を立てながら、「蛤御門の変」の処罰を彫印に華やかに出航する虚勢と重なり合うものである。いずれも、芥川にとって、容認することのできないものであったと言えよう。

第二は、森、井上の風論議と西山夫人の武士道精神との対応である。

《膝の上には、手巾を持った手が、のつてゐる。(略) 同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに気がついた。

(略)——婦人は、顔でこそ笑つてゐたが、実はさつきから、全身で泣いてゐたのである。(略) それから、二時間の後である。(略)——先生の頭の中は、西山駕子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。》(「手巾」)

「西洋人の衝動的な感情の表白」(「手巾」)に「怪訝」(同)な思いを抱く長谷川先生が、感情の抑制の強く利いた西山夫人の「けなげな振舞」(同)に、強い共感を覚えるのは当然の成り行きである。三島由起夫の作品解説の中に、芥川は「無意識のうちに、西山夫人のステレオタイプな人生的演技を一つの静止した形

で、(へ型)の美と認めていた」という指摘が見られるが、無意識の衝動を捉えたとするならば、「手巾」の芥川は、「型」の美だけではなく、「我々自身の悲哀もしくは苦痛を露すことにより他人の快楽もしくは安静を害せざるよう要求する」「礼」の枠組みによつてはじめて生きる、人間的な崇高さと豊かさを認めていたと言えないこともないであろう。このいずれにせよ、対照化と価値低落による滑稽諷刺を生かそうとすると、西山夫人は、高い人間の価値を備えた人物でなければならなかったのである。これは、「虱」において、森、井上の両侍が虱論議の中で用いる高邁な言辭と同質の機能を持ったものである。

「孝経」の精神を支えに、「身体を、虱如きに食はせる」(三)非を容める井上の高邁な道徳主義とか「たとひ恩を着ぬにせよ、妄に生類の命を断つなど」は、言語道断」という森の人倫主張は、それが高尚な文化性を持てば持つほど、虱とのコントラストが鮮明となり、諷刺が生きてくるのであるが、これと同様に、西山夫人の感情抑制の利いた武士道精神が「けなげな振舞」として美しく描き上げられれば描き上げられるほど、「ストリントベルクの指弾する演出法」とのコントラストが鮮明となり、価値低落を伴う諷刺が生きてくるのである。

「虱」とは異なる「手巾」の形象破綻は、高邁な西山夫人の精神性が、不幸な状況に置かれた一人間の重い人格的存在の総体を通し、生き生きと具象化されたことによるものであり、これは、

虱によつて価値低落を起す森、井上の形骸化した言辭とは異なり、芥川自身、まだ裁ききることのできない重い人間的価値を備えているものではなかったらうか。

第三は、「虱」と「ストリントベルクの指弾した演出法」との対応である。これは、すでに見てきたように、高尚なものの価値低落を惹き起す重要な仕掛けである。高邁な武士的存在性をはじめとして、生の実体を伴わないさまざまな形式主義やその欺瞞性を裁いていく重要な武器になっている。

このような対応要素は、作品形象の機軸をなすものであり、「虱」は「手巾」の重要な形象素地をなしていると考えられるのである。

## むすび

「猫」の諷刺精神を生かし、さらに、「第七夜」の形象イメージをも導入しようとした「虱」の芥川は、作品の末尾において、鮮明なイメージを定着させながらも、認識上の破綻を招いたと言わざるを得ない。これは、人物、状況、事件など、作品構成の要素を古今東西の文学作品の中に博搜し、独自のモチーフのもとに、絵画的な再構築を図る造形作家・芥川の蹟きと言えるが、「虱」の破綻部に封じ込められた「民衆」的エネルギーは、長い時間の経過の後、「蜜柑」や「一塊の土」などの主人公のしたたかな生の空に具象化されたと見ることができる。

「虱」の芥川は、笑いの批評精神を有効に機能させながら、鋭利な諷刺を小気味よく生かしているが、『手巾』の芥川は、この批評精神の抜断を潜り抜けていく、意外に重い或る生命体と向かい合わなければならないのであつたのである。それは、不幸な状況に置かれながらも、美しく身を処していかうとする西山夫人の人間的存在感の重みである。「地獄変」「奉教人の死」などの主人公に見られる苦渋に満ちた生の美しさと「煙草と悪魔」「神々の微笑」などの作品世界に広がる文化風土の問題は、この西山夫人の生の重みの認識線上に捉えられたものと言えるのではなからうか。

#### 〈注〉

(1) 吉田精一氏は『「虱」は一週間経たない内に出来たもので彼にとっては最初の原稿料——一枚三拾銭だった——を得た作品である(統野人生計事)という以外、多く云ふ必要はない。』  
(芥川龍之介の芸術と生涯)一九五二、一〇、河出書房)と評されている。

(2) 芥川龍之介『羅生門・鼻・芋粥』作品解説(一九七八、七、角川書店)

(3) 笑いの構造(一九八三、四、角川書店刊(闇のバトス)所収)

(4) 夢十夜の理念と構想——人間存在の探求——  
(一九七九、四、明治書院刊(夏目漱石——作品の深層世界——)

#### 所収)

(5) 「死相」「尾生の信」における「夢十夜」の受容度(拙稿「父」(芥川龍之介)小考(一九八三、七、岡山県立短期大学研究紀要参照)を合わせ考えるとき、『虱』に及ぼす「第七夜」の影響度は十分推定できる。

(6) 日本歴史10 明治維新(一九六三、四、統売新聞社)参照。(7) 注(6)に同じ。(8) 井上庸著(日本の歴史下)(一九七二、七、岩波書店)

(9) 芥川龍之介「南京の基督」(角川版)解説(一九五七、九、新潮社刊(現代小説は古典たり得るか)所収)

(10) 新渡戸稲造著(武士道)(一九八三、五、岩波書店)

(11) 磯貝英夫氏の「あきらかに西山夫人の問題を考えつめてはいない」(国文学、一九七二、一二、学燈社、(作品論手巾))とされる見解と佐藤泰正氏の磯貝論を踏まえ「人間不在の劇に終ったところにこの作の致命的な欠陥がある」(別冊国文学、一九七九、二、学燈社)とされる見解は重要である。